

本邦初公開・井伏鱒二の郷土・栗根を歩く—青木ゼミフィールドワーク 2023—  
付・復元工事中の廉塾を訪ねる

人間文化学科 教授 青木美保

人間文化学科青木ゼミでは、井伏鱒二の郷里周辺を舞台とする作品「在所もの」の舞台についてフィールドワークを続けています。今年度は、ゼミ生3年10名・4年4名、学科の2年・1年各1名、併せて16名が参加しました。

今年度の計画は、井伏を育てた身近な生活空間、加茂町栗根を踏査するもので、井伏研究においても前人未到の画期的な調査となりました。それは、「在所もの」原点のコアスポットであり、井伏文学の隠れたホームグラウンドを深く味わう体験でした。

加茂町栗根ご出身の広島大学名誉教授・世良正文先生（専門・量子物質科学）の導きに従って、5月15日（土）10:00から調査は始まりました。その行程は、2つに別れます。

1, 妙永寺から大林寺に向かう坂道を上る

・随筆「郷里に寄す」に描かれた明治末期の銅山開発のころの旅館、バス停、料亭など当時の繁華街

・大林寺に上がる山の中腹に、栗根の三賢人（窪田次郎・藤原武夫・井伏鱒二）の一人、藤原武夫の旧宅跡。藤原武夫と井伏は一つ違いで小学校の同窓生。

2, 銅山跡（刈光、芋原）から井伏邸まで、谷川の流れて沿って下る

・随筆「川」に描かれた谷川の流れて沿って周辺の風景を鑑賞する

・井伏が祖父と姫谷焼の発掘をするために芋原まで登ったという木阪の入り口。

今回のフィールドワークで体感した井伏の郷土の世界観で、最も印象に残ったのは、その地形です。世良先生も、平原である神辺と対比して、起伏の多い栗根の地形が井伏文学を生んだとの見解を示されましたが、その地形を足であるいて体感することができました。

まず栗根の谷の部分から二つの坂・木阪と長右エ門坂を上った先に、芋原という標高400メートルの高地があり、その高地に囲まれた全体が播鉢状とでも呼べるような一つの空間を作っているということが分かりました。それは、井伏が初期作品でよく取り上げた「谷」のイメージの原点ともいえるものでしょう。

また、それぞれの地名には、人々の生活の歴史を刻むエピソードがあるのです。例えば、「長右エ門坂」という坂の名称は、この坂道の道幅を拡げるなど、私財をなげうって道の整備に尽力した川原田長右エ門という地域の篤志家の名前から取っているとのこと。ちなみに、この坂は、馬乗観音（山野町）への参詣路であったとのことでした。



大正初期に開発された銅山の間歩跡

そして、その谷の真ん中を、山の上からしみだすように流れ出してだんだんと太い流れと  
なって流れ下る一本の川が、命の水のように流れています。これも全く井伏文学における風  
景の原点を思わせます。その真ん中のあたりに、子供のころの井伏が泳ぎを覚えたという淵  
があります。

地域には、このように生活の記憶が刻み込まれたスポットが時間の層が積み重なるよう  
に畳み込まれているのです。そこに、井伏の書いた作品が一つ加えられて新しいスポット  
を形成していることを理解することができました。



粟根の街を歩く



井伏家菩提寺・妙永寺にて、講師・世良正文氏のお話を聞く

午後は、工事途中の廉塾を見学

### 1、廉塾は国の「特別史跡」

菅波哲郎先生の解説によって、廉塾についてのお話を聞きました。廉塾は、江戸後期に、全国に名を知られた漢詩人の菅茶山が神辺に創設した学校です。

今回は、復元工事中の施設を見学しました、廉塾が国の「特別史跡」であるのは、菅茶山の居宅と講堂と学生寮の三つがそろって遺っているからだとのことで、貴重な施設であることを知りました。



工事中の廉塾を見学

### 2、廉塾の学問と花のイメージ

廉塾は当初「金粟園」と呼ばれていたようで、「金粟」は金木犀のことを指すこと、門前

の薔薇は、中国原産の「庚申薔薇」という品種であること、寮は「槐寮」と呼ばれており、庭に植えられた「槐」は「仁政」の象徴であったとのお話を聞きました。

学生達は、それぞれの興味から、今回の実地調査に参加し、それぞれに得るところがあったようです。「井伏鱒二が遠い人ではなく実際に私達と同じ世界を生きていた1人の人間なのだということを実感できました」との感想がありました。



練熟の前庭にて、講師・菅波哲郎氏のお話を聞く。